

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。伝説の深夜番組「カノッサの屈辱」でその名を世間に広め、「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



1月17日、プレゼンテーションにて

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながらその魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。大分県選出の匠、竹藝家の「麻生あかり」さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

本プロジェクトは2016年、放送作家として「料理の鉄人」などの多くのヒット番組を手がけ、またくまモンの生みの親でもある小山薫堂氏をプロジェクトのスーパーバイザーに迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意匠研究所）らをサポートメンバーに発足。

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

1月17日に都内で行われた商談会では、百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて半年間をかけて製作した自身のプロジェクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。また、商談会の終盤ではビームスジャパンとのコラボレーション企画「LIFE with NEW TAKUMI」新しい匠、新しい暮らし」が発表されるなど、プロジェクトも進化している。



プレゼンテーション

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かして、新しいモノづくりを挑む「匠」を応援する。

# シンプルでモダン、竹のアクセサリ 素材の面白みや楽ししみ方提案

### 昭和の町商店街にアトリエを構える

硬く、弾力性に富み、縦に細く割れる竹。マダケ生産量が日本一の大分県では、竹工芸品が暮らしに息づいている。中でも、日用品から芸術性の高い工芸品へと進化した別府竹細工は国の伝統的工芸品。別府市には国内唯一の竹工芸専門学校「県立竹工芸訓練センター」があり、多くの竹工芸作家を輩出してきた。

豊後高田市を拠点に、竹のアクセサリブランド「MIKAI BAMBOO」を主宰する麻生さんもセンターで学んだ一人。兵庫県出身の麻生さんは、モノづくりを仕事にする道を探る中、アトリエから日用品まで幅広い作品を生み出す竹工芸に引かれ、竹工芸家を志した。



竹林で材料となる竹の切り出し

麻生さんの現在の拠点は、国東半島北部に位置する豊後高田市。「昭和の町商店街」の一角に、かつて銀行だった建物を改装してアトリエを構えている。作品に使用する竹は国東半島で育ったもの。国東半島の竹は節と節の間が長く、しなやかなフォルムを作ることでできるのだという。

「未開の世界を切り開く」という思いを込めた。伝統的技法である「別府竹細工」を基本に、アクセサリという領域で竹の新たな可能性を提案している。「竹のアクセサリを通して、竹という素材の面白みや新しい用法、楽しみ方を提案したい」と麻生さん。1本の竹ひごから生み出されるイヤリングや、伝統的な「たが編み」を用いたリングなど、華やかな場所での装いにもフィットする「シンプルでモダンな竹」を追求してきた。「竹の軽やかさは、身に着ける人に装うこととの気負いを感じさせません」と、その魅力を説明する。



アトリエを構える昭和の町商店街



エリア・コンサルティングの様子

今回の応募に際し、「私にとっては大舞台。民芸ではなく、アクセサリが好きなので訴求できるプロジェクトを作りたい。サポートメンバーや匠との交流で、新しい目線や考え方に会えるのが楽しみです」と意欲を語っていた。



作業道具

## 立体的X字の編み目「キアズマ」

麻生あかり 大分／竹藝家



荒割り、剥ぎを経て竹ひごを作っていく

出してから竹ひごづくり、作品制作まで全て一人で行っている。「行き詰った時に外部となることが作品制作のブレークスルーになり得ると実感した」と振り返る。

キアズマによる作品は、イヤリング、バングル、ポウタイの3種。菱形のキアズマが耳元で揺れるタイフのイヤリングは、どの角度からも美しく見えるデザイン。ポウタイは洗練された造形の中にぬくもりも感じさせる。バングルは腕に添うようオーダー制の商品として提案した。いずれもエレガントな存在感を放ち、身に付ける人を高揚させる。

「竹という素材には弱さもある。そこを超えて、アトリエのような竹のアクセサリを目指したい。一つ一つが麻生あかりの作品として認識してもらえらるものができたらうれしい」と感謝する。

プロジェクトを通して出会った全国の匠からも刺激を受けた。麻生さんは竹の切り



完成プロダクト「Chiasma(キアズマ)」

最も時間を掛けたのがキアズマを構成する竹ひごの幅と厚みのバランス調整。強くてもしなやかな竹も、曲線が強いと折れてしまう。薄くすれば折れにくくなるが、竹らしい質感が損なわれる。立体感を演出する厚みを維持しつつ、美しい造形に仕上げるにはどうしたらいいか。試作を重ねた。

色合いにも自分らしさを込めた。染色し、漆で仕上げた竹ひごには色合いによってさまざまな表情がある。同じ編み方であっても、異なる色味の組み合わせによってパリエーションは広がる。「目で見て楽しいもの、面白みのあるものにした。可能性は無限にある」



麻生あかり  
大分／竹藝家

兵庫出身。大分県立竹工芸訓練センターで竹工芸の基礎を2年間学び、修了後竹のブランド「MIKAI BAMBOO」を立ち上げる。「47 accessories 2 - 47都道府県のアクセサリ展」大分県代表。2017年イタリアアトリエナーレ美術館「JAPAN DESIGN WEEK in MILANO」出展。

